

Title	毛澤東の『実践論』(認識と実践との関係:知と行の関係を論ず)
Sub Title	Translation of Mao Tsê-Tung's "Shih Chien Lun" (on practice)
Author	及川, 恒忠(Oikawa, Tsunetada)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1951
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.24, No.9/10 (1951. 10) ,p.161- 171
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	林毅陸先生追悼記念號 資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19511015-0161

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

資料

毛澤東の『実践論』

（認識と実践との関係―
知と行との関係を論ず）

及川恒忠

毛澤東の『実践論』が発表されたのは、一九三七年七月のことである。それが今年の春になつて急に各方面に取上げられ、新聞や雑誌の評論を賑はし、われわれを驚かしたものである。恐らく中共政治が量的にも質的にも拡大された今日、共産シオリストと共産行動派との関係が、はじめの頃に較べて、スムーズに往かないやうな機会が多々起り、そのため理論と行動との関係を論じた毛澤東の『実践論』に一つの重要指針たる役割を演じさせようとしたためでもあるだらう。

毛澤東選集出版委員会と称するものが『……教条主義者はマルクス・レーニン主義の外套をかぶつて多数の同志を迷はした。毛澤東同志の『実践論』はマルクス主義的認識論の視点から党内の教条主義と経験主義——ことに教条主義というこの主観主義の錯誤を指摘暴露するために書かれたのであり、重点は実践を軽視する教条主義の主観主義を指摘暴露するところにあるので、『実践論』と題されたのである』（『新華月報一九五一年一月号』）と説明したところから見て、きやうに判断されるのである。

『実践論』はすでにソ聯共産党の機関雑誌ボルシエウイーキが之を訳載し（一九五〇年十二月出版第二十三号）、またプラウダ紙も同年十二月十八日の紙上で之に論評を加へた（この論評は前記新華月報が

転載してゐる）といふことであるから、わたくしも新華月報所載の『実践論』を本誌に訳載することとした。いまひとつ、今期の本紙はわが林先生を追悼するための記念号であり、後学のわたくしとしては、是が非でも何か一文を寄せなければならぬのに、近業の持合せが無かつたので、この訳文をもつて責をふさいだ次第である。

マルクス以前の唯物論は、人の社会性を離れ、人の歴史発展を離れて認識問題を観察した。そのために、認識の社会実践に対する依存関係、すなはち認識の生産と階級闘争とに対する依存関係を了解することが出来なかつた。

マルクス主義者は、まず、人間の生産活動は最基本的な実践活動であり、それはその他の一切の活動を決定するものであると考える。人の認識は主に物質の生産活動に依存し、漸を逐うて自然現象、自然の性質、自然の規律性、人と自然との関係を了解する。しかも生産活動を通して、程度の違ひこそあれ、漸を逐うて、人と人との一定の相互関係を認識するのである。一切のこの種の知識は、生産活動を離れては得られない。階級のない社会では、各個人は社会の一員たる資格を以てその他の社会成員と協力し、一定の生産関係を

結成し、生産活動に従事して人類の物質生活問題を解決する。各種階級のある社会では、各階級の社会成員は、いろいろ違ふ方式を以て一定の生産関係を結成し、生産活動に従事して人類の物質生活問題を解決するのである。これが人の認識発展の基本的な来源である。

人の社会実践は生産活動の一種だけに限られるものではなく、猶多くのその他の形式すなはち階級闘争、政治生活、科学及び芸術的活動などがある。總して社会実際生活の一切の領域はすべて社会の人が参加するところである。されば人の認識は、物質生活以外に政治生活や文化生活の中から（物質生活と密接に連繋するが）、いろいろ異つた程度で、人と人との各種の関係を知らるのである。その中でもことにいろいろな形式の階級闘争は、人の認識発展に深刻な影響を与へる。階級社会に在っては、各個人は一定の階級の中に生活してゐるから、そのいろいろな思想は階級的烙印を押されないわけにはいかない。

マルクス主義は、人類の社会的生産活動は一步又一步と低級から高級へと発展するのであり、人々の認識も自然界の方面に対すると社会の方面に対するとを問はず、すべて一步又一步と低級より高級に向つて発展し、浅きより深きに入り、片面からヨリ多くの面に到達する、と考へる。非常に長い歴史の期間に、大抵の人は社会の歴史につき、ただ片面的に了解するに限られた。これは一方では、搾取階級の偏見が常に社会の歴史を歪曲したためであり、また他の一方では、生産規模の狭小が人々の眼界を制限したからである。人々が社会の歴史的発展に対して全面的歴史的了解をとげ、社会に対す

る認識を科学に変へることが出来たのは、大生産力——大工業に伴つて近代無産階級が出現する時になつてからのことである。かういふのがすなはちマルクス主義の科学である。

マルクス主義は、人々の社会実践だけが、人々の外界に対する認識の眞理性の標準である、と考へる。ところで、実際の事情はかうである。すなはち社会実践の過程において（物質生産の過程に於て、社会闘争の過程に於て、科学実験の過程において）人々がその考への中で予想したところの結果に到達したときにおいてのみ、人々の認識が実証されたのである。人々が工作の勝利に達しようとするなら、すなはち予想の結果に到達しようとするなら、必ず自己の考へを容視外界の規律性に合体させなければならぬ、若し合はざなければ実践中に在つて失敗して下う。人々が失敗を嘗めた後、失敗から教訓を得て自身の考へを改め、これを外界の規律性に適合させるならば、人々はよく失敗を変じて勝利となすことが出来るのであつて、いはゆる『失敗は成功の母』とか、『一度濠におちれば智慧が湧く』とかいふのは、すなはちこの道理なのである。弁証唯物論的認識論は、実践をもって第一の地位におき、人の認識は寸分も実践を離れる事は出来ないと考へ、実践の重要性を否認し、認識を實踐から引き離すところの誤まれる理論を一切排斥するのである。レーニンはいふ——『実践は（理論的）認識より高い。何となればそれは普遍的品格を持つのみならず、なほ直接の現実的品格をも持つてゐるから』（註一）

註一、レーニンの『ヘーゲル「論理学」の摘要』から引く。

マルクス主義哲学の弁証唯物論は二つの最も顯著な特点を持つて

る。一つはその階級性であつて、弁証唯物論は無階級のために役立つものであると公然と声明するのである。いま一つは、その実践性であり、理論の実践に対する依存関係、すなはち、理論の基礎は実践であり、また転じて実践のために役立つものであると強調するのである。認識あるいは理論が真理なりや否やを判定するのは、主観が如何に感得したかによって定まるのではなく、客観の上で社会实践の結果がどうであつたかによって定まるのである。真理の標準は社会的実践だけである。そしてまた実践的視点は弁証唯物論的認識論の第一のそして基本的な視点である(註二)。

註二、マルクスの『フォイエルバッハ論綱』及びレーニンの『唯物論と経験批判論』第二章第六節参照。

しからば人の認識は、畢竟、どうして実践から發生し、また実践に役立つのか？ この点は認識の發展過程に看れば明瞭にわかるのである。

元來、人は実践過程の中で、始めはただ各個事物の現象方面を看るに過ぎない、すなはち各個事物の片面や、各個事物間の外部連繫だけを看るのである。例へばある外来の人達が延安に視察に来たとする、初めの一日二日は彼等は延安の地形・道路・家屋を看てまわり、幾多の人に接触し、宴会やパーティーや群衆大衆に参加し、いろいろの説を聴いたり、各種の文書類をみたりするが、かういふのがとりもなほさず事物の現象であり、事物各個の片面及びそれら事物の外部連繫なのである。これらは認識の感性段階と呼ばれ、とりもなほさず感覚と印象の段階である。次いで延安のこれらの別々の事物が、視察団の人達の感官に作用して彼等の感覚を引起し、彼等

の脳中にそこばくの印象と、これら印象間の大体の外部的連繫とを生起させるが、これが認識の第一の段階である。この段階に在つては、人々はまだ深刻な概念を造つて論理にかなふ(すなはちロジックに合ふ)結論を作り出すことは出来ない。

社会实践の継続は、人々に実践の中で感覚と印象といったものを何回も反復して惹起させる。これによって人々の脳裡に一つの認識過程中の突変が起り、概念が生れるのである。概念といふ、このものは既に事物の現象ではなく、事物の個々の片面でもなく、それらの外部連繫でもない、それは事物の本質、事物の全体、事物の内部連繫を掴み取つたものである。そして概念と感覚には、ただに数量上の差別ばかりでなく、なほ性質上の差別があるのである。かういふふうが続けていって、判断と推理の方法を使用するならば、そこで論理にかなふ結論を産出すことが出来るのである。『三國演義』にはゆる『眉頭一皺すれば計、心に浮ぶ』とか、又われわれが普段の言葉でいふところの『考へさせて下さい』とかは、とりもなほさず人が頭腦の中で概念を運用して判断と推理を作らうとする工夫である。これが認識の第二の段階である。外来の視察団の人達は、彼等の集めた各種の材料に、彼等の『よく考へてみる』を加へたのち彼等は始めて『共産党の民族統一戦線の政策は、徹底的で、誠実で、また真実である』といふ、このやうな判断を作り出すことが出来る。そして彼等がこの判断を作り出した後、若し彼等が團結救国もまた真実だ、といふのなら、彼等は一步進んで次の結論を作り出すことが出来る——『抗日民族統一戦線は成功し得るものである』と。この概念、判断及び推理の段階は、人々の事物に対する完全認識の

過程においてヨリ重要な段階であり、それはとりもなほさず理性認識の段階である。認識の眞の任務は、感覺を通して思想に到達し、遂次に客觀事物の内部矛盾を了解し、その規律性を了解し、この一過程と他の一過程との間の内部連繫を了解することに達すること、すなはち論理的認識に到達することにある。重ねて曰ふが、論理的認識が感性的認識と不同である所以は、感性的認識は事物の片面的な、現象的な、外部連繫的なものに属し、論理的認識は、一步大きく進んで事物の全体的な、本質的な、内部連繫的なものに到達し、周圍世界の内在的矛盾の暴露に到達し、これによって周圍世界の總体から、周圍世界のあらゆる方面の内部連繫から、周圍世界の發展を把握するものである。

このやうな、実践に基くところの、淺きより深きに入るところの弁証唯物論の認識發展の過程に対する理論は、マルクス主義以前にあっては、一人でもこのやうに解決したものはない。マルクス主義の唯物論が最初にこの問題を正確に解決したのであって、それは唯物的にそして又弁証的に認識の深化運動を指摘し、社会の人は彼等の生産と階級闘争の複雑なそして常に反復される実践のうちで、感性認識から論理認識に到達するといふ推移の運動を指摘したのである。レーニンはいった——「物質の抽象、自然規律の抽象、価値の抽象及びその他のさういったもの等々、一言でいへば、あらゆる科学的な（正確な、鄭重な、出鱈目でない）抽象は、すべてヨリ深刻に、ヨリ正確に、ヨリ完全に自然を反映する」と。（註三）

註三、この段はレーニンの『「ヘーゲル」論理学』の摘要から引く。

マルクス・レーニン主義は次のやうに考へる。認識過程の中には二つの段階の特性があり、低級段階では認識の表現は感性的であり、高級段階では認識の表現は論理的である、しかしいづれの段階もすべて統一の認識過程の段階である、つまり感性和理性の二者の性質は同じではないが、相互に分離するものではなく、それらは実践の基礎の上に統一されてくるのである、と。われわれの実践はかう証明する——感覺したものをただちに理解することは出来ないが、ただし理解したものだけをヨリ深刻に感覺することを。感覺はただ現象問題を解決するのみで、理論ははじめ本質問題を解決するのである。これらの問題の解決はいささかたりとも実践をはなれることは出来ない。何人といへども、何かの事物を認識しようとすれば、その事物と接触すること、すなはちその事物の環境のうちに生活する（実践する）以外には、解決する途がない。封建社会に在って資本主義社会の規律を予め認識することが出来なかつたのは、資本主義が未だ出現せず、この種の実践が無かつたからである。マルクス主義は資本主義社会だけの産物である。マルクスは自由資本主義時代に帝國主義時代の特異の規律を予め具体的に認識することは出来なかつた。つまり帝國主義といふ、この資本主義の最後段階が未だ到来せず、この種の実践がなほ無かつたからである。レーニンやスターリンという人達だけが、かうした任務を担ひ得るのである。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン等が彼等の理論を作り出すことが出来たのは、彼等の天才といふ条件の外、彼等が自ら親しく当時の階級闘争や科学実験の実践に参加したといふことに主によるのであり、このあとの一条件が無かつたならば、たとへ

天才であったとしても成功することは出来なかつた筈である。『秀才は門を出でずしてあまねく天下の事を知る』といふことは、技術が発達しなかつた古代では、一つの空なことではあるにすぎないが、技術の発達した現在では、しかし、この言葉を実現することが出来るのである。すなはち、ものを真正によく知る人は、天下に実践しつゝある人で、その人達は彼等の実践のうちから『知』を取得し、文字と技術の伝達を通して秀才の手にこれを渡し、秀才はそこで間接に『天下の事』を知ることが出来るのである。若しある種の又はある二・三の事物を直接に認識しようとするならば、ただ自ら現実の变革、すなはちある種の又はある二・三の事物を变革する実践的闘争に参加してのみ、はじめてその種の又はその二・三の事物の現象に触れることが出来、又自ら現実を变革する実践的闘争に参加してのみ、はじめてその種の又はその二・三の事物の本質を暴露してそれらを理解することが出来るのである。これは何人でもが実際に歩んでゆく認識路程であり、ある一部の人が故意に歪曲して反対をとなへるに過ぎない。世上最も笑ふ可きものは、あの一部の

『智識裏手』^{チニヤツリハセト}（註四、裏手とは湖南の方言で得意がる人といふ意味）である。道聴途説の一知半解をもって自ら『天下第一』に任じるなどは、まったく自分を量れないかぎりである。智識の問題は一個の科学の問題で、半点たりとも虚偽や驕慢があつてはならないのであり、決定的に需められるところは、その反対の面——誠実と謙遜の態度である。智識を得たいと思ふなら、現実を变革する実践に参加すべきである。梨のうまさを知らうと思ふなら、梨を变革して喰べてみなければならぬ。原子の組織や性質を知らうと思ふな

ら、物理学と化学の実験を執行し、原子を变革する情況をつかまへなければならぬ。革命の理論と方法とが知りたければ、革命に参加しなければならぬ。

真に知ることがすべて直接の経験から発するものである。しかし人は事ごとに直接経験することは出来ないから、事実上多数の知識は、すべて間接に経験したものであり、それは古代と外国についてのあらゆる知識のやうなものである。それらの知識は古代人や外人は直接に経験したものであり、古代人や外人が直接経験したとき、レーニンが説くところの条件すなはち『科学的抽象』に符合し、客観的物事を科学的に反映したものであれば、これらの知識は信頼し得るものであり、しからざれば信頼出来ないものである。されば一個人の知識は直接経験するものと間接経験するものとの二つの部分に外ならない。しかも我にあつては間接経験たるものは、人にあるてはなほ直接経験たるのである。故に知識の総体について曰へば、如何なる知識といへども、それはすべて直接経験を離れることが出来ないものである。どのような知識でもその源は、人の肉体感官の客観外界に対する感覚に在るのであり、この感覚を否認し、直接経験を否認し、現実を变革する実践に自ら参加するのを否認するなら、その人はすなはち唯物論者ではない。『智識裏手』^{チニヤツリハセト}の笑はれる所以は、とりもなほさず、この点に在るのである。中国人に伝はる古い言葉に『虎穴に入らずんば虎子を得ず』といふのがある、この言葉は人々の実践に対して真理であり、認識論に対してもまた真理である。実践を離れて認識することは不可能である。

現実を变革する実践に基いて生れる弁証唯物論的認識運動——

識が漸を遂ふて深化する運動を明瞭にするため、以下幾つかの例を挙げてみる。

無産階級の資本主義社会に対する認識は、その実践の初期——機器を破壊し、ならびに闘争を自発する時期においては、彼等はほぼ感性認識の段階に在り、ただ資本主義の各個現象の片面及びその外部的連繋を認識したにすぎなかった。しかし彼等の実践の第二の時期——意識をもち組織をもつところの経済闘争と政治闘争の時期に達したときには、実践から、長期闘争の経験から、そしてまたマルクス、エンゲルスが科学的方法を用ひてこれ等の経験を綜合し、マルクス主義の理論を産み、これを用ひて無産階級を教育し、このやうにして、無産階級に資本主義社会の本質を理解させ、社会階級の搾取關係を理解させ、無産階級の歴史任務を理解させた——などを経て、この時に彼等は變じて一個の『自為的階級』となったのである。

中国人民の帝国主義に対する認識もまたそのやうである。第一段階は表面的感性的の認識段階で、太平天国運動と義和團運動等一連の排外主義的闘争に表現された。第二段階においてははじめて理性的認識段階に進み、帝国主義の内部と外部の各種の矛盾を看破し、その上、帝国主義が連合したる中国の買弁階級と封建階級が中国人民大眾を圧搾する実質を看破した。この種の認識は一九一九年の『五四』運動前後からはじめて始まったのである。

われわれはまた戦争について看よう。戦争の指導者は、もし彼等にして戦争の経験を持たなかつた人であるならば、一個の具體的戦争(例へばわれわれの過去十年の土地革命戦争)の深刻な指導規律について、始めの段階においては了解していなかつたのである。彼等は

始めの段階では、ただ身を以てそこばくの作戦の経験を經るのみでしかも多くは敗戦を嘗めるのである。しかしこれらの経験(戦勝の、とくに敗戦の経験)から、彼等は全戦争を貫く内部のもの、すなはちその具體戦争の規律性を了解し、戦略と戦術とを了解し、これによつて戦争をしつかり指導することが出来るやうになるのである。その後かりに無経験の者に換へて戦争を指導せたとすれば、またもやいくつかの敗戦を吃した後に(経験をもちた後に)はじめて戦争の正確な規律を理會するやうになるといふわけである。

或る一部の同志が、工作の任務を勇敢に受取れないとき口にする『確信がない』といふ言葉を常々聴くが、どうして確信がないのであるか? それは彼がその工作の内容と環境とに対して規律性の了解をもたないか、或は彼が従来この種の工作に接触しなかつたか、或は多く接触し得なかつたかで、この種の工作の規律性を知るによしなかつたからである。工作の情況と環境とについて詳細な分析を与へてやれば、その後は、彼は比較的的確信を持ち、その工作に従事することを願うやうになるであらう。もしこの人がその工作のうちである期間を経過すれば、彼はその工作の経験を持ったのであり、彼がまた心を虚しうして情況を看察する人で、主視的に、片面的に、表面的に問題を見る人でないならば、彼は如何にして工作を進めるべきであるかの結論を自身で作ることが出来て、彼の工作の勇氣も、非常に高められるのである。よく有ることであるが、主視的、片面的、表面的だけに問題を見る人が、ある地方に往つて、環境の情況を問はず、事情の全体(事情の歴史と全部の現状を看ず、又事情の本質(事情の性質及びこの事情とその他の事情との内部連

響)に触れることもせず、しかも自ら人に号令しようとすることがある。このやうな人は蹟かないわけにはいかない。

かう見て来ると、認識過程の第一歩は、外界の事情に接觸することに始まり、感覚の段階に属する。第二歩は感覚の材料を綜合して整頓と改造を加へることであり、それは概念、判断及び推理の段階に属する。そして感覚の材料が十分豊富(細かく碎かれて全からざるものでなく)であり、且つ突際(錯覚ではなく)に合致するものであるかぎり、はじめてこのやうな材料に拠つて正確な概念と理論とを造り出すことが出来るのである。

ここで必ず明かにしなければならぬ二つの要点がある。第一は前に述べたところであるが、ここで再び重複すると、それは理性認識は感性認識に依存するといふ問題である。もし理性認識は感性認識によらなくも得られると考へるなら、その人はこれ一個の唯心論者である。哲学史上にいわゆる『唯理論』なる一派あり、ただ理性の實在性を承認して経験の實在性を承認せず、理性のみが頼りになり、感覚的经验は頼りになるものでないとする。が、この一派の錯誤は事實を顛倒したところに在る。理性というものが頼りになる所以は、正にその来源が感性にあるからであり、さもなければ理性といふものは、源のない水、本のない木となり、わづかに主観自主的な頼りにならぬものとなつてしまふ。認識過程の秩序からいへば、感覚経験が第一のものである。われわれが社会実践の認識過程における意識を強調するのは、社会実践のみが人の認識を始めて発生させ、客観外界から始まって感覚経験に到達させるからである。目を閉ち耳を塞いで、客観外界と根本的に絶縁する人は、いはゆる認識

の無い人である。認識は経験に始まる——これが認識論の唯物論である。

第二は認識は必ず深化すること、則ち認識の感性段階は必ず発展して理性段階に到達することである——これがとりもなほさず認識論の弁証法である(註五)。

註五、レーニンが『ヘーゲル「論理学」の摘要』で述べたところの『理解するためには、必ず経験の上で理解、研究を始め、経験から一般へと高く登つてゆくべきである』を参照。

若し認識は低級な感性段階に停頓し得ると考へ、ただ感性認識のみが頼り得るものであり、理性認識は頼りにならぬものであるとするならば、それは歴史上の『経験論』の錯誤を重複するに過ぎない。この種理論の錯誤は、感覚材料はもとより客観外界のある眞実性の反映(わたしはここで経験はただ所謂内省体験のみであるとするあのやうな唯心的経験論に言及するのではない)であるけれど、それらは僅に片面的なそして表面的なものに過ぎず、この種の反映は不完全であり、事物の本質を反映するものでない、といふことを知らない点に在るのである。事物の全体を反映し、事物の本質を反映し、事物の内部規律を反映するためには、必ず思考の作用を通して豊富な感覚材料につき、粗を去り精を取るところの、偽を去り眞を残すところの、ここより彼に及ぶところの、表から裏に及ぶやうな改造の製作工夫をもって、概念及び理論の系統を造つてゆかねばならない。則ち感性認識から躍進して理性認識に到達しなければならぬのである。このやうにして改造された認識はもはや空虚な、また頼りにならぬ認識であるのではなく、反対に、それが認識過程

のうちで、実践の基礎に根拠して科学的に改造されたものであるかぎり、まさにレーニンの曰ふ如くヨリ深刻に、ヨリ正確に、ヨリ完全に客視物を反映するものである。俗庸の事務主義者達は、さうはしない。彼等は経験を尊重して理論を軽視し、そのため客視過程の全体を通視することが出来ないで、明確の方針を欠き、遠大な前途も持たず、一得の功、一孔の見で得意になってゐる。もしこのやうな人が革命を指導するとしたら、かならず革命を壁に突き当たるころまで引きずって往くであらう。

理性認識は感性認識に依存し、感性認識は発展して理性認識に到達する、かういふのが弁証唯物論的認識論である。哲学上の『唯物論』や『経験論』は、みな認識の歴史性あるいは弁証性を理解してゐない。それらはいづれも片面の真理（唯物的唯理論や経験論について言ふのであり、唯心的唯理論や経験論を指すのではない）を有するが、しかし認識論の全体からはすべて誤りである。感性から理性に到達する弁証唯物論的認識運動は、一つの小さい認識過程（例へば一つの事物あるいは一つの工作についての認識）に対してもそのやうであり、一つの大きな認識過程（例へば一つの社会あるいは一つの革命に対する認識）に対しても、さうなのである。

しかも認識運動は、ここに至つてなほ完結したわけではない。弁証唯物論的認識運動は、理性認識に到達するだけで終りになるとするならば、それは僅に問題の一半を説いたにすぎない、しかもマルクス主義の哲学にてらしていへば、非常に重要でないところの一半を説いたに過ぎないのである。マルクス主義の哲学が非常に重要なりとする問題は、客視世界の規律性を了解し、これによって世界を

解釈しようといふことに在るのではなく、客視規律性に対するこの種の認識をもって、能動的に世界を改造することに在るのである。マルクス主義から看ると、理論が重要なのであって、その重要性はレーニンが述べたところの「革命の理論なくして革命の運動はない」（註六）という一句に充分よく表現されてゐる。

註六 レーニンの『何をするのか？』第一章第四節から引く。

しかもマルクス主義が理論を重く看るのは、まさに、又ただ、理論のみが行動を指導し得るからである。たとへ正確な理論があつても、只これを空談化し、これを高閣に束ね、決して実行しないのなら、このやうな理論はいくら好くても意義の無いものである。認識は実践から始まり、実践を経過して理論的認識に到達し、また再び実践に返らなければならぬ。認識の能動作用は感性的認識から理性的認識に到達する能動的飛躍に表現されるばかりでなく、更に重要なのは、理性的認識から革命の実践に到達するこの一飛躍に表現されなければならぬことである。世界の規律性を掴んだ認識は、必ずそれを世界を改造する実践のうちに回返し、それを再び生産の実践、革命的階級闘争の実践並に科学実験の実践のうちに用ひなければならぬ。これがすなはち理論の検証と理論の発展の過程であり、全認識過程の継続である。理論的ものが客視真理性に符合するや否やの問題は、前に述べたところの感性より理性に到る認識運動のうちでは完全に解決されない、また完全に解決することも出来ない。この問題を完全に解決するためには、理性的認識を社会実践のうちに回返し、理論を實踐に応用して、それが予想した目的に到達し得るや否やを看なければならぬのである。幾多の自然科学の

理論が真理であるとされるのは、自然科学者達がこの種の学説を発見したときのことであるばかりでなく、しかし其後の科学実験が実証したときに在るのである。マルクス・レーニン主義が真理であるといはれるのは、マルクス、エンゲルス、スターリン等の人が科学的にその学説を構成したときのことであるばかりでなく、その後、革命的階級闘争と民族闘争の実践がその学説を実証したときに在るのである。弁証的唯物論が普遍的真理なりとされる所以は、如何なる人の実践でも、すべてその範圍を脱出することが出来なからである。人類認識の歴史はわれわれに幾多の理論の眞理性は不完全であり、実践の検閲を通じてそれらの不完全性が糾正されるものであると、告げてゐる。すなはち幾多の理論は誤のあるものであり、実践の検閲を通じてその錯誤が糾正されるのである。実践は真理の標準であるといはれ、『実践は認識論の第一のそして基本的な観点である』(註七)といはれるわけは、とりもなほさずこの点に在るのである。スターリンはうまく説明した——『実践を離れた理論は空洞であり、理論を離れた実践は盲目的実践である』(註八)と。

註七 レーニン『唯物論と経験批判論』から引く。該書第二章第六節参照。

註八 スターリン『レーニン主義の基礎を論ず』より引く。該書の第三部参照。

ここまで曰へば、認識運動は最早や完成したと考へられるであらうか？ われわれの答は完成したのであり、また完成せずである。社会の人々が、ある発展段階内に在るところのある客観過程を革新する実践(ある自然過程を革新する実践たる)、あるいはある社会過程

を革新する実践たるを論じない)のうちに身を投じ、客観過程の反映と主観能動性の作用とによって、人々の認識を感性的より理性的に移行させ、該客観過程の規律性にたいたい相応する思想、理論、計画、あるいは方策を造り、しかる後、再びこの種の思想、理論、計画、あるいは方策を、その同じ客観過程の実践に應用して、若し予想の目的を実現し得たならば、すなはち予定の思想、理論、計画、方策をその同じ過程の実践のうちで、変じて事実と為し得たか、又は大体において変じて事実となし得たならば、這の一具体過程に対する認識運動は先づ完成したのである。例へば自然を革新する過程のうちで、ある工事計画の実現したこと、ある科学の假想が実証されたこと、ある器物が製作されたこと、ある農産物が収穫されたこと、また社会を革新する過程のうちで、ある龍業が勝ったこと、ある戦争が勝ったこと、ある教育計画が実現したこと、はすべて予想目的が先づ実現したのである。しかし一般的にいふと、自然を革新する実践のうちにあると、社会を革新する実践のうちにあるとを問はず、人々が以前にきめた思想、理論、計画、方策が毫も改変されずに実現されることは極めて少くない。それは現実の革新に従事する人々は幾多の制限を受けてゐるからであり、常に科学条件と技術条件の制限を受けるばかりか、客観過程の発展及びその表現程度の制限(客観過程の方面及び本質が未だ充分に暴露されてゐない)を受けるからである。かうした事情の下では、実践のうちから、嘗ていまだ料らざりし情況が現出し、これによって思想、理論、計画、方策を部分的に革新することは常に有ることであり、また全部的に改変することも有ることである。言い換へれば原定の思

想、理論、計画、方策が部分的にあるいは全部的に実際と合致せず、部分的に誤ったり、又は全部的に誤ったりすることは、よく有ることなのである。永い期間の間失敗を何度となく反覆しなければならなかった後、はじめて錯誤の認識を糾正することが出来、またはじめて客観過程の規律性と相符合するまでに到達し、これによりはじめて主観的なものに変えることが出来るのである。すなはち実践のうちで予想の結果に到達することが出来るのである。いづれにしても、この時期に達したとき、人々のある発展段階内にあるところのある客観過程に対する認識運動は、先づ完成したのである。

けれども過程の推移から言ふと、人々の認識運動は完成しないものである。如何なる過程も、それが自然界に属するものと社会に属するものとを問はず、すべて前に向て推移し、前に向つて発展するのであり、人々の認識運動もまた推移と発展とに跟いていくのである。これを社会運動からいへば、真正の革命の指導者は、自己の思想、理論、計画、方策に錯誤があったときは、よろしく改正しなくてはならない。これは前にすでに述べた通りであるが、そればかりでなく、ある一客観過程がすでにある一発展段階から別の一発展段階に向つて推移変転する時に當つては、よろしく自分自身及び革命に参加する一切の人達をして、主観認識において、推移変転に跟いていかせなくてはならない、すなはち新しい革命の任務と新工作方法の提出をして新しい情況の変化に適合させなければならぬのである。革命時期の情況の変化は極めて急速であり、もし革命党人の認識がこれに隨つて急速に変化し得ないならば、革命を導いて勝利に向はせることは出来ない。

ところで、思想が実際よりもおくれる、といふことは常に有ることである、それは人の認識が幾多の社会条件の制限を蒙るからである。われわれは革命隊仲間頑固派に反対する。彼等の思想は變化した客観情況に隨つて前進することが出来ず、歴史の上では右傾機會主義たることを表はしてゐる。このやうな人は、矛盾の闘争が已に客観過程の前に向つて推進したのを見る事が出来ないで、彼等の認識は依然として旧段階に停止してゐるのである。あらゆる頑固黨の思想にはすべてこのやうな特徴が有るのであって、彼等の思想は社会実践を離れたものであり、彼等は社会といふ車輪の前頭に立つて指導的工作にあたることは出来ない。彼等はただ車の後に跟いてゆき、車が早く走りすぎるのを怨み、車を後ろに引きずらうとして車をひっくり倒すのを知つてゐるだけである。

われわれはまた「左」翼空談主義にも反対する。彼等の思想は客観過程の一定の発展段階を超え、ある者は幻想を真理と看なし、ある者は将来にだけ実現する可能性のある理想を、強いて現在にあてはめようとし、目前大多数の人の実践を離れ、目前の現実性を離れ、行動の上では冒険主義たることを表はしてゐる。

唯心論と機械的唯物論、機械主義と冒険主義は、すべて主観と客観の分裂を以て、認識と実践の離脱を以て特徴とする。科学的な社会実践を以て特徴とするマルクス・レーニン主義的認識論は断固としてこれらの錯誤思想に反対せざるを得ない。マルクス主義は、絶對的な總体的宇宙の發表過程のうちで、各個の具体的過程の發展はすべて相對的であり、因つて絶對真理の長流のうちで、各一定の發展段階に在る具体過程に対する人々の認識は、ただ相對的眞理性を有

するのであり、無数の相対的真理の総和がとりもなほさず絶対的真理である、と考へるのである。(註九)

客観過程の發展は矛盾と闘争に充ち満ちた發展である。人の認識運動の發展もまた矛盾と闘争に充ち満ちた發展である。一切の客観世界の弁証法的運動は、すべて先にか、後にか人の認識のうちに反映して来る。社会実践中の發生、發展及び消滅の過程は無窮であり、人の認識の發生、發展及び消滅の過程もまた無窮である。一定の思想、理論、計画、方策に根拠して客観現実を變革するのに従事する実践は、一度又一度と向前するのであり、人々の客観現実に対する認識もまた一度一度と深化する。客観現実世界の變化運動は永遠に完結しないものであり、人々の真理に対する実践中に在る認識もまた永遠に完結するものでない。マルクス・レーニン主義は決して真理を決算するのではなく、実践のなかで真理を認識する道路を不斷にきり開くのである。われわれの結論は主観と客観、理論と実践、知と行との具体的歴史的统一であり、一切の具体歴史を離れたる『左』的あるいは右的錯誤思想に反対するのである。

註九 レーニン『唯物論と經驗批判論』第二章第五節参照

社会の發展が今日の時代に達したので、正確に世界を認識し世界を改造する責任は、すでに歴史的に無産階級及びその政党の肩の上に落ちてきた。この科学的認識に根拠して決定されたところの、世界を改造する実践過程は、世界に在っても、中国に在ってもすでに一個の歴史の時節——有史以来未曾有の重大時節に到達したのであって、それは根こそぎ世界と中国の暗黒面を推翻し、彼等を転変して未だ有らざりし光明世界にするのである。無産階級及び革命人民の

世界を改造する闘争は、次に述べる任務を実現することを包括する。すなはち客観世界を改造して、また自身の主観世界を改造すること——自己の認識能力を改造して、主観世界と客観世界との關係を改造することを。地球上にはすでに一部分この種の改造が実行されたのであつて、それはソ連である。彼等はなほもこの種の改造の過程を促進してゐる。中国人民と世界人民はいづれもこの種の改造過程にまさにあるか、あるいは通過しようとしてゐる。所謂の被改造の客観世界はその中に改造に反対する一切の人々を包括してをり、彼らが改造されるには強迫の段階を通過しなければならぬ。しかる後にはじめて彼らは自覚の段階に這入ることが出来るのである。世界が、全人類が、自覚して自己を改造し、又世界を改造するに至ったとき、その時こそは世界の共産主義の時代である。

実践を通して真理を発見し、そして実践を通して真理を實踐し、また真理を發展する。感性認識から能動的に發展して理性認識に到達し、そして理性認識から能動的に革命実践を指導し、主観世界と客観世界を改造する。実践・認識・再実践・再認識・かうした形式は循環往復して無窮であるが、実践と認識の各一循環の内容は、すべて前に比較して一級高い程度に進達する——かういふのが即ち弁証唯物論の全部の認識論であり、とりもなほさず、弁証唯物論の『知』『行』統一観である。